

はしがき

今日の多くの仏教教理学および文献学的な研究はおどろくほど目ざましい研究の成果を果たしていることは、誰も否定することは出来ぬ事実であろう。むしろ仏教研究がこのように盛んな成果が現れている時代は仏教の歴史の中ではほとんどお目にかかることがなかったのではないだろうか。特に、最近の日本の仏教学研究においては、様々な形で非常に重要な問題点の提起が相次ぐことによって、学会に注目を浴びることは非常に興味深いところである。

しかし、仏教の本質は文献学的な教理学研究のみで十分に明らかにされるわけではない。仏教は人間本来のあるべき姿を示すものであろう。つまり、仏教は古代バラモン思想の、神中心的世界観から、人間中心の世界観に転換させた実存的かつ人間学的な教説であるといえる。

したがって最初期の仏教教団は、出家主義の立場に立ち、一見一般社会から離れた形をとりながら、その実一般社会とは不即不離の関係を保ち、深く大衆の心をとらえて、社会に広く大きな影響を与えた。同時に一般的な宗教的諸観念、中でも特に業・輪廻思想と密接にかかわるようになった。それでは、当時の仏教徒――原始仏典に反映する古代インド仏教徒――の生活において、出家主義的な涅槃の教えがどのようなにはたらいたのであろうか。世間レヴェルの業・輪廻思想がどのように受容され、それは涅槃という出世間レヴェルの価値観とどのようにかわり、調整されたのであろうか。

こうした問題意識から、仏教を「文化」としてとらえ、業・輪廻思想を原始仏典の事例からさぐり明らかにしようと試みたのが本書である。

本書は、大学入学以来、すべてが不備でかつ浅学未熟な著者が、指導教授奈良康明先生より活気ある仏教研究方法の御指導をいただいたことがきっかけとなり、常に公私ご多忙にも関わらず、懇切でかつ適切賢明なる御指導により、まとめることができたものである。ことに、本書の作成の際には、愚鈍な著者のために六年の間欠かさず、週一回のペースで、研究室および御自宅において、得難いイン

ドの実体験を踏まえた正確な原典解説方法、ならびに仏教を「文化」としてどのように捉えるべきか、一切の研究方法について献身的な御指導を賜った結果である。従って先生の学恩は著者の生涯にわたって忘れることは出来ない。のみならず、私生活においても、精神的な面を始め、そのご恩は計り知れない。ここに先生の御恩にたいし万感の思いと深甚の謝意を捧げたい。そして来日以来、いたらない著者をお慈悲あふれるお心で見守り、種々のご指導を仰ぐ栄誉を賜った東方学院長中村元博士（東京大学名誉教授）を忘れることはできない。特に本書をまとめるに当たっては、ゆきずまりの著者の心を察し、常に励ましのお言葉を賜り、適切かつ高潔な御教導を賜った。ことに、平成二年から平成四年まで、先生の格別なご配慮により、「財団法人、東方研究会」の多額の留学研究費を賜り、著者としては何の経済的心配もなく、研究に専念することが出来、今ここに本書が実を結ぶようになった。先生の深甚なるご恩に対する感謝の意は筆舌に尽くすことができない。また、ともすれば怠惰かつ菲才な著者を来日以来ご叱正と常に変わらぬ、ご教示を賜り、東京での十年のあいだ由緒あるアパート（江戸川アパート）を無料で提供し、身の回り一切に関してご懇恩を賜った前田恵學博士（愛知学院大学教授）ご夫妻には感謝の念を禁じ得ない。なお、私生活において、来日以来、経済的および精神的な面でわが子のように見守り、ご支援を惜しまれなかった島田俊匡（前早稲田大学教授）・喜久子（全日本仏教婦人連盟専務理事）ご夫妻に感謝の念を捧げたい。さらに、著者が日本に留学できるように諸般のご支援、ご教導を賜った金知見博士（韓国国立精神文化研究院教授）のご恩を忘れられない。ここに謹んで謝辞を申し上げたい。以上の六人の先生のご温情と御指導がなかったら、今日の著者は存在しなかったであろうし、本書も作成することは出来なかったに違いない。

最後に本書は、昨年（平成三年）提出するはずであったが、著者の不注意によりパソコンの操作ミスで入力論文のかなりの部分が消去され、奈良康明先生のご尽力により大学院委員会に嘆願書を出し、委員会の諸先生と、大学側のご配慮を賜り、特例として提出期間を一か月延長していただいたにも関わらず、結局は提出することが出来なかった。著者としては身を削るような苦境の一年であった。

この場をかりて指導教授奈良康明先生、大学院の委員会の諸先生、大学院担当の教務の方々にお礼と共にお詫び申し上げたい。そして学部時代から常に激励のお言葉とご教導を賜った田上太秀博士、水野弘元博士、佐藤達玄博士、片山一良教授、吉津宜英博士に感謝の念を捧げたい。また、外務省の古川清（駐ルーマニア特命全権大使）先生、文部省の西澤良之（大臣官房政策課長）先生には、格別なる御配慮を賜った。ここに謹んで謝辞を申しあげたい。そして、阿部慈園博士（明治大学専任講師）、畏友 Sri Lanka の Thero Alubomulle Sumanasāra 師には並々ならぬお世話を頂戴した。その御厚情に対し、改めて哀心から謝意を表したい。

平成四年（1992）十月二十日

著者 金 漢 益 謹白